

今回は 芸術（音楽）の授業改善報告 です。

◇ 研究授業

日時： 2021年11月12日（火）5限
対象： 1年7組（40名）
担当： 佐々木詠衣子
科目： 音楽I
単元： 和楽器の演奏～三線の音色の魅力を味わおう～

※11月12日（火）に岐阜県教育研究会芸術部会音楽部会において本校にて、研究授業が予定されていましたが、コロナ対策のため、関市文化会館にて授業実践報告のみとなりました。

学習活動：

- (1) エエ四（文化譜）に慣れ、演奏できるようにする。
- (2) 三線を用いた弾き歌いに挑戦する。
- (3) 琉球音階に親しむ

◇ 研究授業の成果と今後の課題

三線の学習の様子

8月末からの自宅学習期間が延び、レンタル期間にかかることを懸念しながらも、本年も無事に三線の学習を終えました。三線は、中国から琉球に伝来した「三弦（サンシエン）」をルーツとした楽器です。三味線に比べて棹は短く、胴にはニシキヘビの皮が張られています。水牛の角などでできた爪で弦をはじいて音を出します。男絃（うーじる）女絃（みーじる）中絃（なかじる）棹（そー）駒（うま）胴（ちーがー）胴巻（てーがー）など沖縄名称を読むところから開始しました。

「異なる文化への理解を深め、様々な分野で活躍できる人材の育成」のためには日本の文化に対する深い理解が大前提であると年々感じます。沖縄の音楽の文化的・歴史的な背景や三線と人々の生活との結びつき、平和学習という点でも三線を取り上げることには意義を感じています。

今年度で3年目になり「エエ四」という三線独自の文化譜の提示については迷いなく行い、生徒たちも大変熱心に取り組んでくれました。

繊細な楽器で扱いにくさもあり、駒（ウマ）が倒れやすく、最初のうちは駒の倒れる音が鳴り響きます。さらに、カラキイがすぐに緩んで、チューニングが台無しになってしまうトラブルにも多くあるのですが、辛抱強く楽器に向き合う姿勢には感心しました。



今年度は「海の声」の楽譜中に「(8分休符) ♪♪♪♪♪♪♪♪」のリズムで1小節、琉球音階を用いた自作のフレーズを曲中に挟むこと(合いの手を作る)活動を一部のクラスで行ってみました。

「四四中エ工六七」

「中四老合尺中」

「合四工六七六工」

「市中工七六工中」等の琉球音階を思わせる節を多くの生徒が創作しました。



今後の課題

琉球音階を用いた自作のフレーズなどを曲中にはさむ試みは一部のクラスで行うことができましたが、レンタル期間の関係で断念したクラスもありました。また、三線の演奏スタイルである「弾き歌い」を行いたいところですが、コロナ禍で十分に歌を歌うことはできませんでした。また、一

か月のレンタルの期間は短く、名残惜しいものでした。しかし『本物(皮の部分は合皮ではあるが)』を使用し、何より全員で楽しく演奏できたことで、三線の音色の魅力を味わうことができました。

また、沖縄の悲しい侵略の歴史や、戦争で焦土と化した中でも、沖縄の人々の三線への愛着は変わらず、捕虜収容所にて米軍から支給された缶詰の空き缶やパラシュートの紐、そしてベッドの木製部分などを利用し、三線の代用楽器として「カンカラ三線」を作ったというエピソードにも耳を傾けてくれました。関連する歌唱曲も旋律をなぞって歌うことができました。

来年度以降はこの「弾き歌いのスタイル」について三線の音色との関係を深く掘り下げていきたいと思えます。

◇ 次年度への課題(音楽・美術・書道三科に共通すること)

備品不足は改善しつつありますが、40人クラスでは教室が手狭になり、非常に不自由を感じます。(美術、書道の教室では定員20人ほどの教室環境に30人が入っています。)音楽では、机が入らないため、教科書を使うときは同じものをコピーして前の人の椅子の背に張り付けることで対応しています。日々の活動で、生徒にとって不利益が出ない状況を作っていく必要があると感じています。学ぶことや表現するための高い基礎力を持つ生徒たちが、さらにその力を磨き、十分に発揮できるようにしていきたい。芸術活動の思考の深まりや表現の工夫など、実際に構成する活動をよりアクティブにするためには表現活動そのものを鍛錬する必要はもちろん、表現されていることを感じる視野を広げることが重要で、その環境を整えていくことはこれからも芸術科の重要課題であると感じています。